

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：34421

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320146

研究課題名(和文) 魏晋南北朝時期主要都城の「都城圏」社会に関する地域史的研究

研究課題名(英文) A study of "Capital region" societies of major cities in the period of Wei, Jin and the Southern and Northern Dynasties from the perspective of regional history

研究代表者

中村 圭爾 (NAKAMURA, KEIJI)

相愛大学・人文学部・教授

研究者番号：00047383

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,200,000円

研究成果の概要(和文)：魏晋南北朝時代、長安、洛陽、建康等の主要な首都の周辺地域では、「都城圏」社会と呼ぶことが可能な、独特の社会が出現した。この地域では、首都の政治体制を機能させ、大量の人口を維持するため、各地と首都を連絡する交通網が整備され、生産と流通が発展した。また、首都の先進的な意識、文化や好尚が伝わり、他の地域とは異なる独特の地域性が生まれた。この「都城圏」社会の存在は、魏晋南北朝時代の都市が歴史上に果たした役割を考える上で、非常に重要な意味を持っている。

研究成果の概要(英文)：Some unique societies which can be regarded as "Capital region societies" appeared in the surrounding areas of major cities such as Chang-an, Luo-yang and Jian-kang in the period of Wei, Jin, and the Southern and Northern Dynasties. In these regions, function a political system and keep a large number of populations, transport networks between capitals and places in these regions were improved, developing the production and contribution. In addition, advanced thoughts, cultures and trends introduced from capitals created the distinct regional characters. The existence of these "Capital region societies" is key to infer a historical role of capitals in the period of Wei, Jin, and the Southern and Northern Dynasties.

研究分野：中国魏晋南北朝史

キーワード：都城圏 都城圏社会 長安 洛陽 建康 都市

1. 研究開始当初の背景

(1)都市は歴史研究の重要な主題のひとつであり、その重要性は、古代・中世・近代各歴史段階において、都市がその段階の歴史的性格と密接に関わるといふ点に求められるが、中国の漢唐史における都市研究は、帝都長安・洛陽が中心であって、しかもその両都の研究は、巨大城壁・都市形態・内部の空間配置・政治的施設の具体的位置・居住空間、およびそれらの思想的ないし観念的意味についてのものが中心であった。このような漢唐都市像は、それ自体が完結した、閉鎖的で一般社会から遊離した特異な空間と認識されがちな嫌いがあり、そこに漢唐都市研究の限界があった。

(2)漢唐にはさまれた魏晉南北朝時代は分裂時代であって、分裂諸勢力によって各地に政治的中心としての都城が多数建設されたが、例えば鄴・建康・平城等を除けば、なお研究の必要な都城が少なくなかった。さらに、魏晉南北朝都市研究も、上述のような従来の都市研究の方向性が濃厚であり、都市としての普遍的な基本要素はおおむね認識できても、それらの特徴(特にその存在地域に規定された地域的性格)の認識に不十分なところがあった。

2. 研究の目的

(1)従来の都市研究の限界を克服するために、都市を都市それ自体に限定せず、都市が出現することによってその周辺に形成される社会全体の一部として把握し、この社会を分析することが研究視角の中心である。都市は政治・経済・文化の諸側面で、都市近郊・周辺社会に多大の影響力を有していると予測できるのであり、このような視角を設定し、都市の影響力のもとに出現した特定の要素を共有する都市周辺の社会空間を措定し、分析することによって、当時の都市の性格を中国社会の歴史的性格と関連付けて認識することをめざしたものである。

(2)具体的には、都市周辺において都市の影響を受けた地域を指す概念として、「都城圏」社会という作業仮説を設定する。この地域を、平野や山地、河川などの自然条件、都市近郊の集落や墓葬、交通路と関津などの所在から可視化し、それを基礎にして、この地域の産業、流通、社会構造、文化現象などの側面から、この地域の状況や地域性を考察する。この考察を、当時の重要都市である洛陽・長安・建康・鄴・盛楽・平城・成都・襄国・武威・武昌に対して試みることを予定した。

3. 研究の方法

(1)研究の基礎として、文献史料の収集整理を行う。文献史料の基礎は既刊の中村編『魏晉南北朝都城史料輯佚』(163頁、2004年、大阪市立大学文学研究科都市文化研究セン

ター)であり、本書に収録した洛陽・建康・鄴の3都市以外の都市に関する史料を各自の分担都市について収集整理する。なお、「都城圏」社会との比較検討のため、当時の地方志的色彩を有する先賢伝・耆旧伝についても、襄陽・陳留地区を中心に佚文を収集する。これを研究分担者が相互に利用して、「都城圏」社会に対する文献による分析を行う。

(2)魏晉南北朝の主要都市の「都城圏」の可視化を地図、衛星写真等を利用して試みる。具体的には、文献史料(上記都城史料及び地誌、各地域の有名人物記録である先賢伝等を援用する。)考古学的成果(城壁などの都市遺跡、人間の生活圏とその界限を示す墓地の所在等を根拠とする。)地理学的方法(衛星写真、地図等による山川の位置や交通路を指標とする。)現地視察による人間の実感的感覚(日常的行動範囲とそれによる生活圏の想定を試みる。)等を総合した、従来の魏晉南北朝史研究では見られなかった地域空間設定である「都城圏」を可視的に認識する。

(3)研究分担者は、各自分担する都市の「都城圏」社会について、(1)(2)についての作業を行い、可能な限り、その内容を明確にするとともに、随時その内容に関する研究打合せを実施するほか、電子メールを利用した情報交換を行い、それを通じて各分担都市に関して、地域史的比較の視点を加味しつつ、各「都城圏」社会の具体像を把握する。

(4)中国の専門家5人(長安・洛陽・武昌・成都・建康各都市研究の専門家)に海外研究協力者として専門的知見の提供を受けることとし、現地での景観的観察の際に、各地区における観察地の選択、地理的条件の概況説明、各都市の「都城圏」についての批評などを含めた学術交流を実施することとした。また、最終年度には一堂に会して国際シンポジウムを開催し、各都市の「都城圏」社会について、比較史的観点からの意見交換を行うこととした。

4. 研究成果

(1)文献史料整理は『魏晉南北朝都城史料輯佚』(163頁、2004年、大阪市立大学文学研究科都市文化研究センター)を基礎として、王謨『漢唐地理書鈔』・劉緯毅『漢唐方志集成』に未収の佚文収集に努めた。その結果、『東都記』『国都城記』『盧国都城記』『冀州図』等、若干の都城関係資料佚文を収集した。

(2)「都城圏」社会の具体的認識の方法として、衛星写真や大縮尺地図、さらに図像的処理のためのソフトを用いての可視化作業を試行する予定であったが、この点は、研究分担者陳力の長安周辺に関する作業が進展したほか、同小尾孝夫が建康(現南京)周辺について図示化を試みた。(5)で述べるように、

これによって長安西郊、建康の江北を含む「都城圏」は具体的な認識が可能になった。しかし、その他の都市については予期した成果をあげられなかった。これは、研究代表者・分担者の多くが衛星写真の解読やソフト利用に習熟する余裕がなく、また「都城圏」社会の内実の考察に関しては、可視化が重要であると考えた当初の予想が必ずしも妥当とはいえないことが、研究が進むにつれて理解されるようになったことによる。

(3) 研究対象都市所在地の景観的観察は、海外の研究協力者と連絡しつつ、毎年度各1回、実施した。参加者は、第2回が代表者・分担者全員が参加したものの、本務の勤務の日程上、第1回は3名、第3回は5名であった。

第1回は2012年12月、建康（現南京）の西南地区を、南京大学教授胡阿祥・同張学鋒両氏の協力により訪問した。この地域は、当時豫洲（現河南省）からの流民が集中し、東晋南朝政治史に重要な役割を果たした地域であり、また建康への山川所産物資の供給地でもある。全体の地理環境、晋代墓葬の集中地や博物館における遺物などにより、当地と建康の関係等を推測することができた。

第2回は2013年12月、四川省文物考古研究院院長高大倫氏の協力により、成都とその近辺および成都・長安間の交通路を訪問した。成都是重要な都市であるが、魏晋南北朝時代の考古資料が少なく、研究そのものに空白部分が多かったが、今回の訪問で新出考古資料の確認が果たせ、また長安への交通経路を道路遺構等により確認できた。

第3回は、2014年12月、武漢大学教授魏斌氏の参加を得て、中国西北地区の重要都市で、五胡時代の首都の一つであった武威を訪問した。この土地は農牧交錯地帯であり、辺境の都市と農牧境界の象徴である長城遺跡などを観察し、また、武威周辺出土墓誌などを調査した。

以上の景観的観察は、現地専門家との「都城圏」社会の発想に関する意見交換などを含み、研究課題の深化に非常に有効であったと判断している。

(4) 本研究では、「都城圏」社会の仮説的提示について、研究対象地の専門家の意見を積極的に聴取することを重視した。そのために、(3)の現地調査において意見交換を実施するとともに、各都市を比較するための研究集会を第2、第3年度に各1回開催した。

第1回は、研究分担者佐川が研究代表者である科学研究費補助金基盤研究（B）と共催で、2013年9月15日、国際シンポジウム「歴史のなかの都城の作用」（東京大学）を開催した。ここでは建康を題材にとり、海外研究協力者である武漢大学教授魏斌氏が、建康の東郊の状況について、同南京大学教授胡阿祥氏が、建康の歴史特徴について講演し、中村が「都城圏」社会の仮説の説明、小尾が建康

の「都城圏」社会の形成を流民との関係を中心に発表した。

第2回は、2014年12月6日、国際研究集会「魏晋南北朝の主要都城と都城圏社会」（阪南大学、大阪府松原市）を開催した。この会では、海外研究協力者陝西省考古研究院副院長王小蒙氏が、長安建築と建材生産について、海外研究協力者胡阿祥氏から推薦された専門家である南京大学張学鋒氏が建康の東方地域の流通について、同じく高大倫氏推薦の四川省文物考古研究院副院長周科華氏が成都周辺の考古資料について、毛陽光氏推薦の中国社会科学院考古研究所研究員劉濤氏が洛陽城門の発掘状況について講演した。なお、中村が「都城圏」社会研究の意図と進展状況を報告した。

以上2回のシンポジウム（研究集会）は、予稿集を作成し、出席者のみでなく、日中の専門家の一部に配布した。

(5) 「都城圏」社会の仮説の検証については、主要5都市に関して、あらかし以下のような研究結果を得た。

長安は、魏晋南北朝以前の漢代には、その西方郊外に帝陵が設置され、帝陵には陵邑が置かれて、一種の長安の衛星都市のような存在であった。分担者陳力は、その西方郊外に向けて長安城西部から出ていたいくつかの交通路の経路を推測し、またその交通路に沿って設置されていた橋や行政施設の亭の位置を図示し、長安西方の「都城圏」を具体的に把握した。

海外研究協力者王小蒙は国際研究集会で、長安城の建築材としての瓦磚の窯跡に対して行った考古学的調査の詳細な結果を報告したが、それは都市の建設が、建築材の作製・運搬や建築労働への動員によって、周辺社会に大きな影響を及ぼすものであったことを推測させるものであり、「都城圏」社会の経済的状況分析についての手がかりとなるものである。

洛陽については、分担者佐川英治が精力的な研究を継続している。佐川の従来の研究は中軸線を基礎にした都市設計であったが、最近洛陽と周辺の行政区画の人口分析に着手し、「都城圏」社会研究の新しい方向性を提示した。

建康については、分担者小尾孝夫が、南下し、江北地域を含めた建康周辺に居住した華北流民と軍事の関係を主軸に、建康地区における「中央」の創出を想定し、この「中央」の範囲を曲赦と皇帝の聴訟によって規定し、一方その周辺の広陵・歴陽・晋陵なども建康「都城圏」に含まれると考えた。

小尾が課題として残した建康と東方地区との関係は、(5)の国際集会において、建康と東方を結ぶ重要な内陸運河である破崗瀆の意味を、東方の大都市である会稽都の関係で詳細に論じ、建康「都城圏」の具体像の把握に対して重要な知見を披露した。

成都是、本科研においては、主要都市の一つに数えたが、魏晉南北朝時代の成都については、文献史料が少なく、利用すべき考古学的成果もほとんどない状態であったため、得られた成果は多くはない。ただ(5)の国際集会での周科華氏の講演における、2000年代に入っての新出墓数件を含む墓葬の紹介は、今後成都の「都城圏」を研究する上での貴重な資料となると思われる。

襄陽は、当初予定した主要都市ではないが、以前から「襄陽耆旧記」佚文収集と分析を継続していた分担者永田拓治が、関中地区からの流民が集中し、新旧住民の比率等に変化が見られる当該時代の襄陽について、住民の生活圏は基本的に襄陽城にありながら、襄陽と意識されていた空間が襄陽城の周辺地区に拡大することを明らかにし、またその空間的範囲を具体的に推定した。この考察結果は、首都以外の地方都市においても、「都城圏」社会の方法が、都市研究に有効であることを示すものといえる。

(6)本科研の最終的目標は、「都城圏」社会像をもとに、魏晉南北朝史における都市の歴史的性格についての新しい位置付けを説明するというものであった。それは、当時の社会の歴史的段階の把握と表裏一体のものであり、背景の項で述べたように、社会から孤立して存在すると認識されがちであった都市を、社会と密接に関連付けることで可能であると考えられた。そして以上のような成果からみて、都市と都市周辺社会の密接な関係は確認できたと判断している。しかしながら、それを基礎に魏晉南北朝史における都市の歴史的性格についての新しい位置付けを提示するためには、残念ながら、なお多くの課題が残されているとせざるを得ない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計23件)

陳 力、漢長安城西南考 漢長安都城圏研究における可視化を試みて、阪南論叢人文・自然科学編、査読無、第50巻1号、2014、27 40

小尾 孝夫、建康「都城圏」社会及長江対岸、第2届中国中古史前沿論壇論文集、査読無、2014、35 39

佐川 英治、論六朝建康在中国古代都城史上的地位、江南地域文化的歴史演進論文集、査読無、2013、1 20

小尾 孝夫、広陵の高崧とその周辺 六朝南人の一様相、静岡大学人文社会科学部人文論集、査読無、第63号の2、2013、101 129

陳 力、前漢首都圏空間の形成 咸陽原地区における漢代集落の分布と水資源の関係に主眼を置いて、阪南論叢人文・自然科学編、査読無、第48巻2号、2013、111 121、

佐川 英治、漢六朝の郊祀与城市計画、中古時代的礼儀、宗教与制度、査読無、2012、194 223

永田 拓治、上計制度与「耆旧伝」「先賢伝」の編纂、武漢大学学報、査読有、第65巻4号、2012、49 61

永田 拓治、漢晋期における「家伝」の流行と先賢、東洋学報、査読有、第94巻3号、2012、1 34

〔学会発表〕(計22件)

中村圭爾、魏晉南北朝時期「都城圏」社会研究の意図、国際研究集会「魏晉南北朝の主要都城と都城圏社会」、2014年12月6日、阪南大学(大阪府松原市)

陳 力、從漢長安城到茂陵邑、国際研究集会「魏晉南北朝の主要都城と都城圏社会」、2014年12月6日、阪南大学(大阪府松原市)

佐川 英治、中国中古の都城設計と天の祭祀、国際学術シンポジウム「中国古代都城之結構和其歴史空間」、2014年9月19日、ソウル(韓国)

小尾 孝夫、建康「都城圏」社会及江右地区、「六朝研究」国際学術研討会、2013年10月19日、南京(中国)

室山留美子、北魏における上谷寇氏の氏族的位置について、日本道教学会、2013年11月9日、早稲田大学(東京都)

永田 拓治、後漢三国兩晋期における「家伝」の流行、第61回東北中国学会、2012年5月27日、東北大学(宮城県仙台市)

〔図書〕(計1件)

中村 圭爾、汲古書院、六朝政治社会史研究、2013、593

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

中村 圭爾 (NAKAMURA, Keiji)
相愛大学・人文学部・教授
研究者番号：00047383

(2)研究分担者

陳 力 (CHIN, Riki)
阪南大学・国際コミュニケーション学部・
教授
研究者番号：50299020

佐川 英治 (SAGAWA, Eiji)
東京大学・大学院人文社会系研究科(文学
部)・准教授
研究者番号：000343286

小尾 孝夫 (OBI, Takao)
大手前大学・総合文化学部・准教授
研究者番号：905206675

永田 拓治 (NAGATA, Takuji)
阪南大学・国際コミュニケーション学部・
研究者番号：40623393

室山 留美子 (MUROYAMA, Rumiko)
大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化
研究センター研究員
研究者番号：20514029

(3)連携研究者

なし ()
研究者番号：

(4)研究協力者

王 小蒙 (WANG Xiaomeng)
胡 阿祥 (HU Axiang)
魏 斌 (WEI Bin)
高 大倫 (KAO Dalun)
毛 陽光 (MAO Yangguang)